

響

ウル リム (響)

聖公会生野センター機関誌

第19号

2001年5月20日発行

題字：康秀峰

わからない？！

宮嶋 眞

9年間、聖公会聖公会生野センターで共に働かせていただき、数々の学びを受け、ご支援をいただいたことを心から感謝します。

今、高校3年生と共に旧約聖書を学んでいます。創世記の楽園追放の物語を読み、登場する主なる神、アダム、エバ、蛇にどのような印象を持つかを生徒に質問すると、様々な反応があります。「アダムは頼りない。」、「エバはしっかり自分で見て、判断している。」、「蛇は本当に上手に、自分の尻尾を出さないようにしている。」、「神は、やさしい部分もあるが、アダムたちがそむいた時には、力をふるってちょっと勝手では」などです。しかし同時に「わからない」という答えがかなり多くあります。印象を聞いているのですから正解はありません。自分の思うところを率直に言えばいいのですが、「わからない」という反応には戸惑ってしまいます。

「わからない」は便利な言葉で、そう言うと通常教師は、その質問を次の人へと振ってくれます。私はしつこくて、「それはどういうことなんだろうね。質問の意味がわからない?」「いいえ」「このお話のなかで、わからないところがあるの?」「いいえ。」「何を言ったらいいのかわからない?」「はい。それ以上は追求しませんが、しかし、こうした「わからない」は、言っている本人にその意識はなくても、結果としてパスし、最終的には関係を断つ言葉であるように感じられます。「ここが、あそこが、わかりません」と言われるならば、それに対する応答が生まれ、関係は続いていきます。

聖公会生野センターと関わっていた時にも、同じ表現を聞いたことがあります。聖公会生野センターのことが「わからない」と。そのとき適切な応答ができませんでしたが、今、思うと、「どこが

わからないのですか?」「何について知りたいのですか?」「一度実際の働きのか場に来てみませんか」など…。その「わからない」といわれた言葉で関係を切らないように働きかけができればよかったと悔やまれます。聖公会生野センターが今、主に関わっている、精神障害を負っている人々とのかわりについても、その最初に在日の精神科医に声をかけられたときは、正直言ってどうなるかわかりませんでした。反対運動が起こった時、そのほか色々な場面でどうしていいのかわからないことがたくさんありました。「わからない」のは何か明らかにしながら、働きを続けてきました。「難しいですね」という言葉にも同じ響きを感じます。「わからない」「難しいですね」で終わらせては、ならないと思う。

これからの聖公会生野センターの歩みの上に、神さまの祝福が豊かにありますように
(みやじま・まこと 平安女学院高等学校・中学校
チャプレン)



作業所のクリスマス会にて

〈もくじは2ページにあります〉

「新しい歴史教科書をつくる会」が教科書として作成した書籍が、教科書検定に合格した。そして、新たに就任した首相は、敗戦記念日に靖国神社へ公式参拝することをはっきり打ち出した。憲法改正がいよいよ秒読みに入った感が強いと思えば、教育基本法の改正も取り沙汰されている。

こうした一連の動きを目の当たりにして、この国の、この国民の歴史認識はいったいどうなっているのだろうかとの疑問が再燃した。いつの時代においても私たちに求められるのは、自国や自国民の歴史に対して真摯に取り組んでいかなければならないということである。これは、言いかえれば、歴史の事実をありのままに直視するということだ。すなわち歴史の事実を知ること、そしてその中にある歴史の真実を見抜くということなのである。

歴史の真実を曲げて伝えることは改ざんであるから、あきらかにうそである。また、あることだけを述べて、あることには沈黙するというのも、真実を述べたことにはならない。

「侵略」を「進出」とするのは前者に当たり、従軍慰安婦の記述を一切しないということは後者に当たる。いずれも、戦後の歴史学

歴史の真実を見抜くために

研究の成果を無視したものであり、学問に対する冒涇、挑戦でもある。しかし、それは何よりも戦争の犠牲者に対する冒涇である。

戦争では多くの人々が犠牲となった。何百万という戦死者。その死者たち一人ひとりの思いが踏みにじられたのである。その死を犬死にとさせないためにと言われるが、それはこのコラムでもすでに述べたように、まったく逆である。死者の思いや気持ちが、生きている者によって改ざんされたのだ。

かつて「生き残っている者が、死者の思想と行動をいかに自分の望む方向に曲げてつたえるか」を見せつけられたという大江健三郎は、「まだ近い過去についての認識をねじ曲げられ、やはり近い未来への構想をあやまちすらするのではないか」(94年7月18日読売新聞)との危惧をいだいた。この危惧が今現実のものになろうとしているのである。

このような教科書が使用され、首相が靖国神社に公式参拝し、憲法や教育基本法が改正されていこうとする昨今の動きは、まさに、近い過去をねじ曲げたゆえに、近い将来をあやまって歩む道のりそのものである。

かつて、今回とは逆に不合格になった日本史教科書があった。その著者永三郎は、日本国民に戦争責任が生じる理由として「現在の日本の内外には十五年戦争の惨禍のために回復しがたい心身の痛手に悩みながら生きている人々が未だ少なからず見いだされるからである。いずれそれらの人々も逐次この世から姿を消していくことになろうが、それらの人々の抑えきれない怒り、または悲しみに対して彼らをそのような境遇に陥れた責任を明らかにし、できればそれらの人々の在世中に可能な限りの補償を提供する道を開くべきであり、そのためにも責任の所在を確認する必要がある」(『戦争責任』岩波書店)という。

歴史認識の十分でない日本国民は、その当然の結果として、歴史に対する責任意識も希薄だ。多くの犠牲を強いられた近隣アジア諸国から寄せられた非難は当然のことである。

日本国民は、いつまでこのまま恥さらしを続けるのだろうか。

(まつやま・けん 京都聖ステパノ教会信徒)

松山 献

もくじ

1. 巻頭言
わからない?!
2. 時のしるし
歴史の真実を見抜くために
3. 濟州4.3事件の跡地と今を巡る旅
「金石範先生と巡る四・三跡地」に参加して
4. 吉岡数子さん講演録
20世紀からの宿題
6. 本から「在日コリアン」を考える
順伊(スニ)おばさん
7. 日韓聖公会青年交流プログラム
近くて遠かった国、韓国
8. フィリピン地域活動研修報告
フィリピン社会から見た日本社会
9. 濟州島と在日③
濟州の男たち
10. パンチョギの家族日記
やあ、解放だ
11. ご支援くださった方々のお名前

「金石範先生と巡る四・三跡地」に参加して

金啓子

母の懐のような稜線を見せたハルラサン。その父祖の地に降り立ったというのに、わたしは郷愁を覚えなかった。わたしに望郷と呼ぶものがあるなら、祖母が晩年に住んだ六甲の山麓の庵であり、わたしが幼い頃を過ごした貧しい穴蔵のような大阪の長屋であろう。六甲を吹き抜ける風の匂いとすみれの青。長屋の溝の匂いと喧騒と……。旅の間、わたしはなぜここにきたのだろうか?と自問自答していた。濟州島で生まれて五歳まで過ごした父は、先に日本に渡った祖父母の名を岩の上に乗って呼び泣いたという。祖父は幼い頃、白い御飯と甘鯛の汁をくれたら学校に行くと、ただをこねて木に登ったという。祖母や母は女で生まれたというだけで学校にも行かせてもらえず、男は畑に種を撒くように女に植え付けたいいと、代々孫孫、男社会が続くために女が存在したという土地。在日は最近までその因習を踏襲していた。

わたしにとっての濟州島はそんな古い因習から逃れたいと背離の地であった。『火山島』や『鴉の死』に巡りあわなかったら、捨て去った故郷であった。いや、元よりわたしには、捨て去るほどの故郷もなかったのかも知れない。『火山島』の冒頭に濟州島の習俗がリアルに描かれていて、一度は読むのを止めた。しかし、三度目の挑戦で読み進むことができた時、わたしの心の中のわだかまりが溶けていくカタルシスを感じたのだった。四・三事件で犠牲になった人とその背景を解きあかして、指導者を持たない民衆の無惨な様を描き、アジアの名も知れない島で起きた惨劇にとどまらず、人が追い求める普遍的なテーマ、人間の存在理由……。人は生まれおちた時から、その人はかけがえのない存在であることを示してくれたのであった。

火山岩で出来た石垣、黄色の菜の花と赤い椿と、優しいピンクの桜、痩せた竹林。全滅した東広里村はそんな中であつた。茨をかき分けると、討

伐隊に追われた村人が一か月半ほどを過ごしたという洞窟。それらを観光ツアーかスタディツアーかは分からないが毎日訪れるという現実。澁みなく思いをこめて説明してくれた案内員。わたしはふっと不謹慎にも、目取真 俊氏の『水滴』であったか、『魂い込め』であったか忘れたが、沖縄戦の語り部の爺さんが本当のことは決して語れない、と言っていた言葉を思いだしていた。そんなわたしでも、四・三慰霊祭に参加して、真横に立っていた老人が静かに涙をぬぐう姿を見て、初めて涙を流していた。五三年前に南承之がバスに乗って通った新作路では、トラックに繋がれた男女と警護する警官に扮したパフォーマンスがあつたという。でんぼう爺が座っていた観徳亭と、丁基俊が玄関の石段に立っていきそうな警察署の前では、ライブハウスのような組み立てがあつて、若い青年たちの間に四・三事件が表現されていた。しかし、松林と菜の花が咲き、どこまでも青い空と海、ねぎとにんにくが植えられた平和な畑の真ん中にある子供の墓を見て、惨殺された子供たちに想像を巡らせるには、のどかすぎる土地だった。わたしは、これから何度も自問自答して、わたしの心の奥底にひそむ物を溶解せねばならないらしい。

(きむ・けじゃ)



東広里村跡にて

20世紀からの宿題

教科書に見る朝鮮と日本の歴史

毎年、3. 1 朝鮮独立運動を憶えて開催している日韓の歴史を考える集い。

今年は堺市内にある平和人権子どもセンターの代表をされている吉岡数子さんを講師に迎え、「20世紀からの宿題—教科書に見る朝鮮と日本の歴史」と題して3月4日、堺聖テモテ教会を会場に、講演会を開催しました。

原点としての墨塗り

吉岡数子です。堺市内の平和人権子どもセンターに教科書資料館を併設して3年になります。

私のしていることの原点は、敗戦後、学校にいてまずさせられた墨塗りでした。国民学校で教え込まれ、丸暗記させられた国定教科書。国語と国史、地理、修身この4冊の墨塗りをしました。国定教科書は、明治の末から1期から5期とあります。全部、軍国主義教育、国家主義教育への路線を教育の場をつかって見事に教科書の中に織り込んでいっています。私たちは「大東亜共栄圏」「八紘一宇」「五族協和」がアジアへの侵略を美化した虚偽のスローガンであったということにはまったく気がつかずに、敗戦まですごしました。そして、敗戦後、墨塗りをした時点でわたしは、朝鮮や、かいらい「満州国」で子どもの目から見てもおかしいと感じたことは、やはり間違っていたのだと思いました。

私は朝鮮で生まれました。父は朝鮮総督府の官吏で、朝鮮侵略植民地支配の加担者として農地を取り上げる仕事をするために、朝鮮に渡りました。その当時、朝鮮総督府の発行した、朝鮮の子どもたちに強制的に使わせた教科書には、国史、地理、

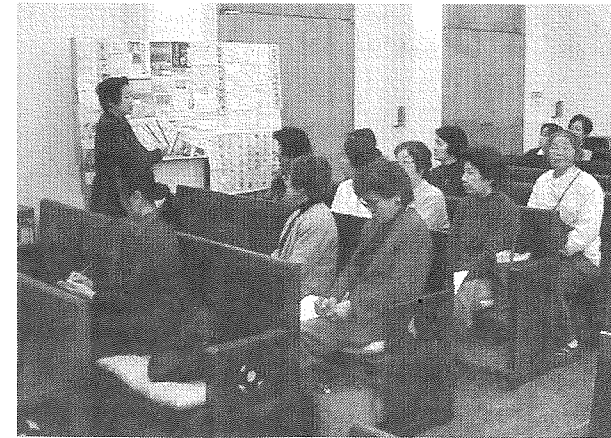
国語、修身もありました。このような資料から植民地支配の実像が鮮明に分かってきます。わたしは、このことを謝罪するために、現地を訪ねて、話をきいたり、資料を集めたり、写真を写しました。そしてできるだけたくさんの資料を教材にして、学校の教師として教育現場で教科書にかかれていない真実を、伝えたいと思ってきました。

しかし私の同級生の多くは、いまだにこの教科書で丸暗記したことは、真実だと思い込んでいます。これが、日本の教育の怖さです。そして、明治に学校が作られたときから、ずっと続いている教育の中身であり、その意味ではその教育の成果がいかに怖いということがわかります。

教科書は決して真実を書いているものではありません。しかし、未だに教科書にうそが書いてあるはずがないと信じて、教科書を中心とした教育が現場でおこなわれています。教科書に書いてあることに間違いはないという意識が、今も続いているということは、とても怖いことだと思います。

この国語、国史、地理、修身の4つの教科書は、わたしは国民学校の6年生とき丸暗記させられました。わたしたちは、1学期は学徒動員で学校へは1日も行けませんでした。机も椅子もない中からはじまり、最初に授業らしいことをしたのが墨塗りでした。担任の先生は、敗戦まではいつも木刀をもっている怖い先生でした。その先生が、国民学校の教科書をもってくるように指示し、「いまから、間違っていたところを消す。」といました。墨を擦るのが遅いと怒られながら、地理と歴史と修身は1ページ残らず全ページ。国語は3分の2くらいです。

墨塗りを体験した世代というのはじつは少ないんです。その中で私は最年長になります。なかでも徹底的な墨塗りをさせられた一人です。学校のなかでもここまで墨塗りをしたのは私のクラスだ



けです。戦争はおかしいと思っていた先生ほど墨塗りはさせてないということもわかってきました。

侵略のために使われた教科書

また、墨塗りは進駐軍の命令でさせられた。と知っている人が多いのですが、じつは、文部省の指示だったということがわかり本当にショックでした。文部省は軍事教材、軍国主義教材、戦意高揚教材、皇室に関する教材、日本のアジア侵略を美化する教材など墨塗りの指示をしました。この教科書を丸暗記するように命令を出していた文部省が、一夜にして変わりこんどは墨塗りの指示をだした。これは単に保身のためで、この内容を訂正しようとはしなかったということです。日本の官僚のこの体質は戦後も変わっていないんだなと思いました。

それから、墨塗りのとき、「教科書の間違っていたところを消す」といわれたので間違っていない真実の歴史はこれから学べると思いました。しかし、それからずっといくら知りたいと思ってもそのような授業はありませんでした。ですから、私たちの同級生は、少国民と呼ばれて教え込まれたことをそのまま持ちつづけています。

教科書というものは、自分が使った教科書か子どもが使った教科書か教員として自分が教えるときに使った教科書しか見ていないし知らないという人がほとんどです。しかし教科書は4年に1度は変わりますし、教科書会社によってもずいぶん違うわけです。

1982年、「侵略」を「進出」に書き換えたとして、アジアからの鋭い批判の声があがりました。その声を受け、徐々に教科書に日本の戦争責任、加害の歴史を記述するようになり、前回の検定された教科書では、日本の戦争責任、加害の歴史をより

記述した教科書になりました。この教科書をこれ以上に後退させてはいけな、と思います。しかし、この動きとは逆の教科書が検定を通ろうとしています。もしその「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書が検定を通ったとしてのその教科書は使わないようにしなければいけません。「国民の歴史」を買って読みました。資料をじかに見てもらうということがしたかったので、「国民の歴史」も資料館に置いています。そのなかに、「朝鮮総督府は朝鮮語読本をつくり、朝鮮語教育もした。」というような記述があります。しかし朝鮮総督府が朝鮮語読本をつくったのは朝鮮語を奪うためだったのが実物をみるとはっきりわかります。朝鮮語を教えるのであれば、6年生の教科書にはもっと朝鮮語が増えてなければならないのに、日本の漢字ばかりになり助詞だけがハングルになっています。記述と実際のものとは比べて見るという機会がないという現実が、そういう誤った歴史認識をまた継承してしまうのではないかと思います。このような教科書が、国定教科書をより巧妙にしたような教科書が残っていくことのないように、わたしは、できるだけたくさんの資料を集めて、その資料をもとに一人一人がいろんな声をあげどんなことをしたらいいのかを考えることのできるようにしていきたいなと思っています。

墨塗りをした中にも、朝鮮で使われた教科書の中にも歴代の天皇の名前というのが載っています。また、修身の教科書には教育勅語がまず最初に載っています。これらの丸暗記させられた歴代の天皇の名前や教育勅語を私は忘れたと思っているのに、いまだにすらすら出てきます。これが教育の怖さだと思います。しかし、どうやら同級生の中ではいやだと思っているのは私だけのようで、懐かしさをこえて、真実だと未だに思っています。これからあとの世代にはそんな教育をしてはいけな、と思います。このことを20世紀からの宿題としてこれからも訴えていかなければならない、伝えていかなければならないと思います。

(よしおか・かずこ 平和人権子どもセンター代表)

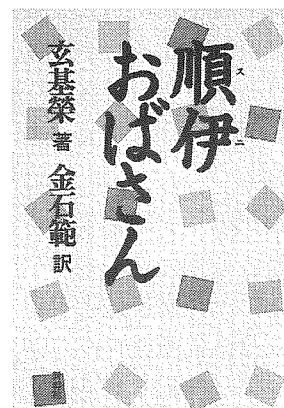
文責：編集部

平和人権子どもセンター・教科書資料館は
開館時間 火・水・木 PM1:00~6:00
〒590-0026 大阪府堺市向陵西町1丁9-3
TEL (0722) 29-4736 FAX (0722) 27-1453

本から「在日コリアン」を考える⑤

高二三

順伊（スニ）おばさん



ヒョンギヨン キムソクボム
 玄基榮 著 / 金石範 訳
 新幹社刊
 定価1600円+税

私は1989年から「済州島四・三事件を考える会」の事務局長をやっている。そして本業としての出版業でも、『済州島四・三蜂起』『済州島「四・三事件」とはなにか』

『済州島四・三事件』（全7巻の予定で5巻まで刊行中）を出版しており、端目から見ると、ことのほか済州島四・三事件に力を入れているように見えることだろう。

1980年代は、私にとっては大きな節目となった時期であった。仕事の面では、長く勤めていた雑誌社をやめて、独立した。生き方では、それまでの、韓国の民主化運動を支援することから、在日の、とりわけ指紋押捺拒否運動を中心にすえたものに変えていった。結婚もしたし、子どもも生まれた。

そのような私の1980年代、指紋押捺拒否と併行しかかわってきたのが、済州島四・三事件であった。それまでの私は、金石範氏の『鴉の死』をはじめとする一連の作品でしか済州島四・三事件を知らなかった。「鴉の死」の与えた衝撃には、はかり知れないものがあった。絶対タブーだった時代、しかも在日でありながら、想像力と思想性で描ききった「鴉の死」の高い芸術性は、戦後日本文学の名作中の名作と言っても過言ではない。

しかし、「鴉の死」とだけの出会いなら、私の手のとどかない、外国映画でも見ているような気分、その立場から一歩も踏み出することはできなかったかもしれない。だが、幸いにも私は金石範氏と知遇を得、作品を読むだけの立場から、作家からいろいろなものを感じ取ることができる立場となった。何故書くのか、何故済州島四・三事件にこだわるのか、それらを知りうる立場となった。

泣きながら「四・三」を語る場面に何度も遭遇した。

「順伊おばさん」の日本語訳が雑誌『海』に発表されたのは、1984年だった。「順伊おばさん」は「鴉の死」とは違う衝撃を与えてくれた。「四・三」そのものの描写もさることながら、その後を生きてきた人々の「四・三」を書いているからだだった。「順伊おばさん」の最後、祭祀をはしごする場面がある。光州事件の後ということもあって一つの村で、同じ日に何百という祭祀があり、線香のにおいが充満しているシーンを何よりも最初にイメージした。そして死んだ者の不幸と、生き残ったものの不幸を思った。だが、不幸にも生き残ったものにはどうしてもやらねばならないことがある。いうまでもなく、死んだ者たちへの慰霊と、真相究明である。

1988年、ソウルオリンピックと前後して、済州島四・三事件が公然と社会的に語られ始めた。それらの市民運動をになった人々の精神的支柱になったのが、ほかならぬ「順伊おばさん」だった。文学者がいて作品を書く。読者がいて心を動かされる。心を動かされた者が市民運動を起こして、社会化する。そして政府をも動かして「四・三特別法」制定にまでいたる。文学が社会を変える力となる。これほどまでに見事な例が他にあるだろうか。

「四・三」のトラウマを克服せねばならない。済州島出身者であるというコンプレックスを克服せねばならない。言葉を換えれば、済州島出身者は、「四・三」から解き放たれていないし、コンプレックスからも自由ではないのだ。「順伊おばさん」を読み、私は思った。済州島出身者は「四・三」を真正面にすえて、それを克服しない限り、主体性（アイデンティティー）の回復はありえない。そんな思いを秘めて、私は済州島「四・三事件」とかわり続けている。

（こ・いーさむ 新幹社代表）

順伊（スニ）おばさんは
 聖公会生野センターでも取り扱っています。

近くて遠かった国、韓国

河崎 真理



日韓聖公会青年交流プログラム 2000年

「近くて遠い国、韓国」という言葉をよく耳にする。私にとっても、韓国はそんな存在だった。

私が日韓青年交流プログラムに初めて参加したのは、2年前のことだった。偶然が重なって参加することになったが、正直なところ私の心は重かった。韓国についてもあまり知らないし、韓国語なんて「アンニョンハセヨ」しか知らない。どうやってコミュニケーションをとればよいか心配だったし、なにより、日本と韓国との歴史をふまえると、仲良くできるのかどうかがとても心配だったのだ。その心配はとりこし苦労ではあったが、いろいろ考えすぎた私は、結局あまり積極的に動くことはできなかった。

それでも、出会ったメンバーたちとの楽しい時間は、私が韓国に興味を持つには十分なパワーを持っていたし、私と韓国との間にあった垣根をとりのぞいてくれた。

そして、去年、2度目の挑戦で、私は韓国を訪れた。相変わらず韓国についての知識は微々たるものだったし、韓国語もしゃべれないままだったが、気持ちは重くはなかった。韓国に行けることが、韓国のメンバーと会えることが楽しみでしうがなかった。気の持ちようというものは行動にかなりの影響を及ぼすものだ。楽しい気分で行った私は前回より積極的に行動することができた。

日韓青年交流プログラムに参加するまでは、韓国にたいして関心は持っていたが、それは、積極的なものではなかった。そして、自分でたくさんのハードルを設定して、動くことができなくなってしまっていた。しかし、これらのプログラムを通して、韓国の仲間たちと出会い、話し、一緒に歌ったり、笑ったりする中で、実際に韓国に足を運ぶ中で、私の気持ちはどんどん変わっていった。韓国に対する関心は以前より強くなった。しかし、それは誰かにいわれたからとか、しなくちゃいけ

ないという変な使命感ではなくなった。出会った仲間たちと、もっともっと出会うために、彼らのことをもっと知るために学びたい・・・そういった積極的なものになった。そして、本を読んで勉強するなどの堅いことだけでなく、韓国の音楽を聞くとか、ただ韓国に遊びに行くなどといったことも韓国を知ることになるのだと考えられるようになった。

日韓青年交流プログラムは、私がより韓国のことを身近に感じるためのはじめの一歩になった。

結局、韓国を近くて遠い国にしていたのは、自分自身だった。韓国の仲間たちとの出会いによって心の距離が縮まり、今は近くて近い国だと感じている。でも、だからといって本当に完全に近くなったとはいえない気もする。彼らとの心の距離にあぐらをかかず、これからも韓国との距離を近くすべく、知りたいという想いを大切にしながら、知ること、学ぶことを続けていきたい。

（かわさき・まり 日韓聖公会青年交流プログラムスタッフ）

日韓聖公会青年交流プログラムは、
 今年も夏の開催に向けて準備がすす
 められています。

フィリピン社会から見た日本社会

鈴木 恵一

今年1月30日から2週間、フィリピンの教会の社会宣教活動についての研修に行ってきました。

1月の終わりごろといえば大阪はまだ寒いときですが、マニラの空港につくと気温は32℃。真夏のような暑さの中、研修が始まりました。

研修のお世話になったのはフィリピン独立教会(Iglesia Filipina Independiente)で、特に移住労働者の課題に積極的に取り組んでいる教会です。フィリピンは政府予算の40%が債務返済に充てられ、不十分な福祉制度のため、人口の75%は貧困層と言われています。そのような社会の中で、誰のためにあり、どんな発言をし、どんな行動をするのか、ということが教会は常に問われつづけています。

移住労働者のコミュニティーを訪問する機会がありました。マニラの中心地からジブニーにのって1時間半。郊外にあるその家は、そんなに大き



移住労働者のコミュニティーであった結婚式

くはないのに、30人が住んでいました。聞くと、ミンダナオの同じ村の出身で、ビザが切れるまで海外で働きこの家に戻ってきて、ビザが取ればまた働きに行くそうです。そのために共同でこの家を借りているということでした。家族がばらばらになってでも、だれかが海外にいて働かなければならない現実があります。

このことは、教会にとっても大きな課題です。誰がどこに働きに行っているかを把握し、その地域の教会に協力を求めていくことを、組織的に取



ストリートチルドレンのサポートも青年活動のひとつ

り組むため、多くのスタッフが働いています。そして、日本でのサポートの拠点に聖公会はなれないかということ、何人もの人から声をかけられました。

フィリピン社会の貧困の原因のひとつに、日本からの企業進出やODAがあります。援助といっても本当に必要としている人には渡らず、一部の人のみの利益となっています。そして貧しい人々の生活の場をますます奪うような社会を生み出しています。このことは戦争の反省や体験から学ぶことを日本がしていないということと無関係ではありません。

ひとりひとりが大切にされる社会をつくっていくために、真実の歴史を見つめなおしそれを伝えていくということが、今も、これからも必要とされていると、改めて強く感じました。

(すずき・けいいち 聖公会生野センター主事補)



フィリピン独立教会の青年たちと

済州の男たち

文京 洙

ある研究 前回、済州島の女たちのしたたかさについて触れたので、男たちのことについても書いておく必要があるかもしれない。済州島での男女のあり方については、70年代という早い時期にフェミニズムの立場からこれを調査した人がいる。趙恵貞さんといい、いまは梨花女子大学の教授。済州島のチャムス(海女のことで、韓国語でもヘニョという言い方がある、植民地時代に日本人がつけた呼称であるとして余り好まれない)の研究者として知られ、70年代にチャムスが多く住む済州島のある海岸村に腰を据え、そこでの男女の「役割分担」と「権力関係」についてつぶさに監察した。

彼女には済州島が「母権社会であり、真正なアマゾン共同体」とあると映った。済州の女たちは「働くこと自体を楽しみ、仕事を通じて得られる代価を誇り高く追求し……自信に満ち、楽観的で積極的な人生観」をもっているという。これに対して済州の男たちはといえば、「肩書きだけは家長であるが、客人扱いをうける周辺人」であり、「他者志向的」、「悲観的」、「受動的」だという。彼らは「朝の起床後もこれといってやることもなく、朝食後は子供を見たり、牛追いに出かけたり、釣りに行ったりで、その都度、時間を適当におくり、木陰に集って討論をしたり、酒を呑んだり昼寝をしたり」するような、まったくの体たらくだという。

趙恵貞さんの仕事は、いまでは、その方法論や



実態の把握の仕方でも多くの問題点が指摘されている。しかし、韓国人の手による済州島社会研究としては先駆けとってよく、「働き者の女」、「怠け者で議論好きの男」といった済州島人にまつわるステレオタイプを根拠づけ補強する役割を果たした。私たちが在日朝鮮人の世界でも済州島出身者についてはこの種の決めつけがいまだに幅をきかしている。もちろん、身に覚えがないとは言わないし、周囲にそれらしき心当たりがないとも言わない。しかし、済州の女が働き者であるということとはともかく、果たして本当に済州の男たちは怠け者なのだろうか。

「鯨の餌」、「海のくず」 済州島北東部の杏源(ヘンウォン)という村を調査した伊地知紀子さんは、植民地期に「男はくじらのえさ」、「男は海のくず」という言い方があったことを紹介している(『生活世界の創造と実践——韓国・済州島の生活誌から』御茶の水書房)。村の男たちが、ときにはチャムスの引率者として、ときには船乗りや漁師として海に出て事故や荒海に死んでいったことを現わす言葉だという。済州島でも危険で力のいる仕事は男が担う。伊地知さんは「役割分担の非規定性」という言い方で済州での男女の分業の仕方を特徴づけている。仕事の役割分担が、儒教倫理とか、いわば社会的につくられた男女の身分差によって固定されず、時代毎の社会環境に応じて、それぞれ体力や体質に見合った役割分担がなされる、といった意味のようである。

たしかに、生活が厳しければ、男であれ女であれ懸命に働き、働くことに様々な楽しみや意味を見出す。「済州の男は怠けもの」、家庭も顧みず「革命」や「学問」にうつつをぬかすのが済州の男たちというのは、やはり、一種のステレオタイプであるといわねばならない。ただ、チャムスは皮下脂肪のおおい女向きの仕事とか、じゃがんで人参畑の仕事は体の固い男には辛い、といった言い方自体も、本当に鵜呑みにしてよいのだろうか。やはりそれは、男の側の身勝手な通念を現わしている、といえ余りにも天邪鬼すぎるだろうか。(むん・きよんす 立命館大学教授)

야! 해방이다

やあ、解放だ



- ① ハエリンの爪を1週間ごとに切ってあげないと…。日本から電話するから「爪を切れと」変なことまで心配するのね。
- ② 爪を切らないとノリバンで子どもたちとけんかしたら顔に傷がつくからね。わかりました。わかりましたよ。
- ③ それから電気蚊取りもあまり加熱したら良くないから屋には消しておいて。
- ④ 私の家ですればいいじゃないの。パンチョギさんが2週間日本に行っているから気軽にできるでしょう。そう、うん、…。
- ⑤ 本当にいいわ。夕方に友だちと話もできず子どものために落ち着くことなく帰らないといけない現実がすぐに近づくんだから。
- ⑥ 子どもの口実で早く抜けてでてくるんですよ。
- ⑦ アッパ、私も日本に行くわ。

作者：崔正鉉（ちえ・じょんひょん）
 パンチョギ（もう一方）の愛称で親まれる。
 1960年韓国大邱生まれ。娘の誕生以降子育てをマンガで表現。ユニークな描写と男性優位の韓国社会で家事分担が評価。1995第1回平等夫婦賞受賞。

- ① 日本で韓日漫画交流展の関係で2週間ハエリンを見られなくなった。食器洗い機を使う時は特に箸に注意しないと。間違えたら故障するから。私が使うことあるかしら。
- ② それから各種支払いも期日を過ぎたら延滞料が付くから間に合うように払って。
- ③ 結婚して一回も銀行に公共料金を払ったことがないので心配だよ。何言ってるのよ。結婚当初は私が払ったこともあるわよ。
- ④ それからこれを見て。
- ⑤ このブドウの木は水をあげないと葉が黄色くなるから、3日ごとに水をやるように。
- ⑥ 特にハエリン、おまえはアッパがいないとブドウをとって食べないように。とって食べよう。



アッパ：お父ちゃん。
 ノリバン：就学前児の託児所。直訳すると遊び部屋

ご支援くださった方々のお名前

(2000年度 2000年4月1日～2001年3月31日 50音順 敬称略)

いつも聖公会生野センターのために、お祈り・ご支援くださりありがとうございます。教会・グループなどで取りまとめてご支援くださった方々のお名前は載っていませんが、あわせて感謝申し上げます。

後援会

相原太郎 相原吉男 青木礼子 青柳哲夫 青柳正宏 青柳美智子 秋山波子 東直子 安達宏昭 アトリエIK 尼子美喜 天野由美 井口諭 生野センター横浜教区友の会 石井義雄 石田浩子 泉迪子 泉田恵美 伊勢田健 井田泉 一花恭子 伊藤幸雄 稲葉勝也 井原洋子 今北富三 今中富美子 今中喜子 今西益一 今村祥子 林芳子 岩城聡 岩城真紀子 岩垂悦子 岩本英 植田哲子 植松従爾 植松誠 浮田真理 内宮隆夫 内海清博 宇野容子 梅本百合子 江野隆夫 遠藤恵子 大賀健二 大川千鳥 大阪教区婦人会 大阪聖アンデレ教会 大阪聖アンデレ教会婦人会 大阪聖パウロ教会男子会 大阪聖パウロ教会婦人会 大阪聖パウロ教会有志の会 太田淑子 太田喜元 大山仁躬 岡野利治 興津健蔵 奥康功 奥田壮一郎 奥田哲夫 小倉真市 納トヨ 小田原聖十字教会婦人会 小野晶子 小野綾子 小野幸 小野田芳大 掛川尚子 葛西良治 梶原史朗 葛城文子 金子みどり 金光秀晃 軽井沢ショー 記念礼拝堂 川上竹治 川村直子 神崎和子 木川田一郎 菊地泰次 木田江悦子 北山和民 衣笠奈良美 金秀吉 金必順 金文秀 木村幸夫 鬼本照男 京都聖マリア教会 国津恵美子 国津進 久保道則 栗山義信 黒崎光太郎 黒崎晋太郎 玄後市四郎 河野芳孝・紀子 後藤一郎 後藤真 小西正人 小林幸子 小林哲也 小林満寿子 小堀孝子 小松ひとみ 小松二三子 小室一 近藤悠紀 齊藤祥子 堺聖テモテ教会 榊原博子 相楽弘子 桜井一生 桜井揚子 桜井揚子 佐々木靖子 佐治菊代 佐治孝典 佐谷和子 佐藤悦子 佐藤耕一 佐藤信行 猿橋靖・正子 志賀成全 洪川良子 島田麗子 社領共美 白石敏子 城下彰 代谷宣子 鋤柄不二子 杉原達 杉本美津子 鈴木章三 鈴木靖夫 清家智光 聖バルナバ病院サマリア会 聖ヨハネ学園 瀬川正雄 関本肇 瀬山義美 多方清子 高田須磨雄 高田日出男 高橋由紀 鷹見作平 高見澤國子 高宮建治 竹下輝 竹中達吾 竹林徑一 辰巳信義 田中恒久 田辺美恵子 田辺聖公会シオン会 谷井尚子 谷元郁子 崔吉子 近澤淑子 千種百合子 筑田克夫 辻節子 辻本敏子 辻本秀子 坪田敬子 当舎あずさ 藤間孝子 藤間布美子 東峰多寿 トータス・ハウス 徳田弘幸 富谷晋 富満美佐子 豊川雅章 内藤昇 中川正信 永坂亜紀 中芝永次 永嶋大典 中西久忍夫 長野加代子 中野三枝子 長野泰信 中原恵 仲村實明 中村大蔵 中山一郎 名古屋学生青年センター 南金毘 西川寿代 西宮聖ベテロ教会 西村逸郎 西元マサエ 丹羽美恵子 直川義人 野田一道 野村潔 橋本宣子 橋本義彦 畑野栄一 服部喜代司 早川善樹 榛木恵子 春名英夫 坂東長輝 東豊中聖ミカエル教会 樋口敏夫 飛田雄一 日高八重子 平賀てる子 平野聡 平野淳子 広木佐代子 黄裕錫・金幸子 深水君江 福岡教会婦人会 福田順子 福田光宏 福永芽久実 藤木典子 藤崎とよ 古本純一郎 古谷利治 芳我秀一 堀貴美子 堀武 堀江育夫 堀江富美 前島素子 前田忠男 前原潔 牧野道信 益海政一 俣野恵子 松居勲 松井新世 松原恵美子 松本一郎 松本正俊 松本信行 三木メイ 水谷博彦 三瀬敏夫 水口正樹 南康子 三村タミエ 三宅肇 武藤六治 村上喜代子 邑上亨 村上義夫 村田洋子 茂木充 茂木恵 桃山基督教会 森紀旦 森美知 守口復活教会 森田斉子 盛田トモ子 森中央 八尾恵三 山口瑳智子 山口博子 山崎哲 山崎ホシ子 山下秀 山田真弓 山根由香 山野繁子 山本勝彦 山本眞 山本眞美子 湯浅七枝 吉田フサ子 四日市聖アンデレ教会 良善幼稚園 和田智雄 渡辺定夫

一般献金

愛楽園祈りの家教会 石田浩子 石橋聖トマス教会 林芳子 ウィリアムス神学館 浮田真理 宇都宮聖ヨハネ教会 梅本百合子 大阪聖パウロ教会 大阪聖パウロ教会有志の会 小野田富美子 川口基督教会 姜富三 金鉄雄 木村幸夫 京都教区京都伝道区信徒伝道協議会 京都教区宣教局社会部 栗山義信 國分電業建設 堺聖テモテ教会 嵯峨崎順子 桜井一生 佐々木靖子 佐治孝典 猿橋靖・正子 志賀成全 鈴木育三・恵美子 高槻聖マリア教会 旅路の里 趙千恵 中山一郎 日本聖公会婦人会 萩ルイ子 林哲子 原田光雄 平野淳子 前田宏子 松原恵美子 宮嶋眞 村田洋子 Motoko Bray 桃山学院聖アンデレ礼拝堂 八尾恵三 山田真弓 吉田フサ子 米山勉 立教小学校ボランティアグループ 和田智雄 渡辺定夫

クリスマス献金

相原太郎 愛楽園祈りの家教会 青柳美智子 秋山波子 芦屋聖マルコ教会 芦屋聖マルコ教会教会学校 池住圭 池袋聖公会 石井宏 伊豆聖マリア教会 市川聖マリア教会 稲原三千 今中喜子 今西益一 岩城聡 植松誠 浮田真理 梅本百合子 恵我之荘聖マタイ教会 遠藤恵子 大阪聖愛教会 太田淑子 岡本勝 小倉真市 小野綾子 葛西良治 加納実 川村直子 姜富三 金春子 金必順 京都復活教会 清里聖アンデレ教会婦人会 草ヶ江幼稚園 栗山義信 神戸聖ミカエル教会 小林克則 小室一 齊藤祥子 桜井一生 桜井揚子 佐治菊代 札幌キリスト教会 三光塾 静岡聖ベテロ教会 島田麗子 清水聖ヤコブ教会 下鴨幼稚園 松蔭高等学校・中学校 笑福亭仁嬌 白石美香 城下彰 鋤柄不二子 逗子聖ベテロ教会 鈴木慰 聖アグネス教会 聖パウロ教会 聖ルカ教会 瀬川正雄 武市温子 辰巳信義 谷富夫 谷井尚子 谷元郁子 千葉復活教会 辻本敏子 寺村直子 東京聖テモテ教会奉仕会 東京聖マリア教会 藤間孝子 特別養護老人ホーム神愛会愛の園シオン会 富山聖マリア教会 中山一郎 名古屋聖マルコ教会 博愛社 橋本克也・玉枝 春名英夫 坂東長輝 黄裕錫・金幸子 プール学院中・高宗教部 吹留辰雄 福岡教会 藤木典子 古本純一郎 平安女学院中・高宗教センター 堀貴美子 堀武 堀江育夫 堀江武 前島素子 前田圭子 前田容子 益海政一 松戸聖パウロ教会 松本信代 三瀬敏夫 水口正樹 宮崎光 宗像和雄・千代子 村田敏郎 目白聖公会 毛利幸枝 桃山学院大学聖教主礼拝堂キリスト教センター 森中央 八木基督教会 安永和中 山口佐栄子 山口瑳智子 横浜山手聖公会 吉田立 吉田フサ子 米村照子 立教女学院 良善幼稚園 和田智雄

これからも聖公会生野センターの活動へのご理解とご支援をよろしくお願いいたします

和解のしるしとして・・・

日本と韓国の聖公会の和解のしるしとして、1992年から始まった聖公会生野センターの活動は、多くの方々に支えられ、現在、広がりをもった活動に成長しています。とくに、日韓・在日の歴史を学ぶ場として、また日韓交流・地域活動研修の現場として、多くの方々に利用していただいています。また、この生野地域に必要なとなっている精神障害者の新しい福祉サービスの立ち上げのために力を注いでいます。このことは、様々な方から評価をいただきました。

誰もが集える場づくりを通して・・・

和解のしるしとして始められた聖公会生野センターが、誰もが集える場づくりを通して、ひとりひとりが大切にされる地域社会をつくりだす小さな種の一つとなればと願いながら、ひとつひとつの活動に取り組んでいます。

後援会へのご入会をよろしくお願いいたします。
聖公会生野センター後援会
郵便振込 00960-0-133429
大阪教区の方は
聖公会生野センター大阪教区後援会へ
郵便振込 00980-1-136834



大阪教区後援会常任理事会が改選され新メンバーでの活動が始まりました(2001.4.28)

余韻

5月15日から今年も大韓聖公会分かち合いの家のスタッフが研修で聖公会生野センターに来ています。聖公会生野センターも分かち合いの家も、その活動が始まっておよそ10年。交流を深めながら、多くのことを学びあいたいと思います。教会が地域から求められていることは、制度の枠にとられない、身近な生活の中にもあるように思います。▼「新しい歴史教科書をつくる会」の教科書が検定を通りました。その抗議の輪に参加している日韓聖公会青年交流プログラムの参加者もいます。直接出会って語り合うことの中から、真実

はなにかということを見極める力が育つように思います。この春の講演会の講師に招いた吉岡数子さんが代表をしている平和人権子どもセンターは、実際の資料を通してそういう心が育つところのように思います。はじめは、たくさんの教科書に圧倒されたりもするのですが、実際に手にとって見ているうちに、自分の習ったことが、思っていたことと違う角度から見えたりもしてきます。ぜひ一度、じっくり時間をつくって行ってみるのをおすすめします。(すずき)

聖公会生野センターへのご支援をお願いします

◇後援会費

年額 1口 3,000円(個人) 1口 10,000円(団体)
・郵便振込00960-0-133429 「聖公会生野センター後援会」

◇自由献金・クリスマス献金

・郵便振込 00910-1-321780 「聖公会生野センター」
・銀行振込 三和銀行 東大阪支店
普通預金 3711311 「聖公会生野センター」

発行所：聖公会生野センター

〒544-0003

大阪市生野区小路東1-17-28

TEL06-6754-4356/FAX06-6754-4357

E-mail: ikuno.po@nssk.org

<http://www.nssk.org/province/ikuno>

発行人：木村 幸夫

編集人：大橋 襄

ウルリムは古紙70%の再生紙を使用しています。